



けいの そら
慶野 空さん

●田沼小学校 6年

夢はロッテの名捕手

ぼくは、TACベースボールクラブに入っています。ポジションは、キャッチャーです。ピッチャーの球を受けるだけでなく、内外野手に指示を出すというやりがいのあるポジションです。

ぼくの父は、高校生の時、甲子園で試合をしたそうです。ぼくも、中学校、高校でも野球を続け、甲子園に出場して活躍したいと思います。そして、プロのスカウトの目にとまりドラフト一位で千葉ロッテマリーンズに入り、現在、ロッテのエースの唐川投手の球をキャッチャーとして受けることが夢です。



市長からの メッセージ



先月5日に「佐野市スポーツ賞」を佐野日大高校硬式野球部に授与いたしました。これはリーディングプロジェクトである「スポーツ立市」を推進するため本年4月に創設したもので、今回が第1号の受賞となります。今後もさまざまなスポーツで、全国大会などで活躍し、本市のスポーツ推進に貢献していただいた方々や団体に、「佐野市スポーツ賞」を授与してまいります。この賞が、皆さんの励みになればと考えています。

梅雨空が続いておりますが、先月8日の大雨により、本市においても道路の冠水や住家などへの被害がありました。この雨は本市の6月の観測史上最多となる激しい雨ということでしたが、消防をはじめ、市関係部署が迅速に対応いたしました。本市では昨年末、および5月末に、職員による災害招集訓練や避難所開設の訓練を実施しており、職員として各自が何をすべきか再確認したばかりでございました。このことが今回の対応に活かされたものと考えております。

また先月15日には、佐野市消防操法大会が開催されました。予選を勝ち抜いた各分団の精鋭たちが一糸乱れぬチームワークで日頃の練習の成果を披露し、客席からは大きな拍手が贈られていました。団員の皆さんは、各自が生業を持ちながら、火災や災害など一朝有事の際には危険を顧みず地域社会を守ってくれています。先月の大雨でも出勤し、巡視、広報や、増水河川などのパトロールを行いました。団員のご家族を含めて、その頑張りにあたたためて感謝いたします。

まだ梅雨も続きます。市民の皆さんにも備蓄や避難場所の確認など、普段からの備えを欠かさないようお願いいたします。

岡部 正英



今回の表紙「ドリームチーム対犬伏クラブ」 6月1日(日)運動公園市民体育館

佐野市制10周年とスポーツ立市元年を記念して、また宝くじの社会貢献広報事業として「はつらつママさんバレーボール in 佐野」が開催されました。

森田淳悟さんや江上由美さん、大山加奈さんなど12人のバレーボール元代表選手がドリームチームを結成し、市内のママさんチーム3チームと対戦しました。

永島 徹さん (田沼町)



○プロフィール

昭和44年12月25日生。

NPO法人「風の詩」副理事長、社会福祉事務所「風のささやき」代表。

市内をはじめ各地で福祉に関する講演・講話などを行う。



連携の尊い輪

物事に真剣に取り組んでいる人の話は自然と心に残ります。

市内にある、ささやかな介護支援施設「風の詩」をご存じですか。11年前、永島徹さんが心ある仲間たちと支え合いの地域を目指して設立したNPO法人の福祉活動の拠点です。

そのクリーム色の施設の前で、永島さんは「福祉的な生活支援が必要になった人たちの代弁者になって、困ったこと、こうしてほしいことなど、課題を一緒に考え、日常生活の質を高めて安心して過ごすことができるお手伝いをして行きたい」と、熱く語ってくださいました。

永島さんは中学生の頃、「ぼくの一生はどうなるのだろう」と考えた学校からの帰り道、まだあぜ道もあつた道を歩きながら、南風に乗りフワリフワリと漂うたんぽぽの種のなかで「人の役にたてたら自分も幸せになれるのでは」と思ったそうです。

永島さんが高校生の頃は、世の中はバブル経済で盛り上がっていました。就職難の時代が来るとは



市内での啓発活動（左はじ）

誰も思わなかった時代でした。進路を決めなくてはならない頃、夜空を見上げながら「ぼくは決めた。大学に入って福祉のことを学ぼう！」と決心したそうです。

その後4年間、福祉に関することをいろいろ学び、社会福祉士の資格を取得し、青森県で精神障害回復者の社会福祉活動に従事。その後、郷里に戻り、民間企業を経て、足利市の介護支援センターにケアマネージャーとして勤務しました。

現在は「風の詩」に併設のデイサービスや、地域福祉全般に関する講演活動などで、近隣との連携の輪を日々広げています。繋ぐ、つなぎ合う連携の尊い輪が永遠に続き、大きな環になっていくことでしょう。（市民記者 田島廣子）



おぶ(負)さることを ブツツアルという

赤ちゃんを背負う、おぶうことを方言ではブーまたはオンブスルといいます。これに対して、おぶさる、背負われることはブツツアルまたはオンブサルといいます。これらの方言は、いずれも市内全域で使われています。どの語を多く使うかわからないかは、年代によって異なります。オンブスルの使用者は中高年者に多く、使用地域も広範囲にわたっています。これに対して、ブーは昔からの古い語であること、オンブスルに比べてややぞんざいであるということもあって、昭和の頃から使用者がだんだん少なくなっています。

「あのかあちゃん？今し方、赤んぼをブッてオーカン（道路を行ったり来たりしてイヤンシタましたよ）オンブスルもブーも「おぶう」が元の語、これが変化したものです。

「おぶさる」の方言には、ブツツアルとオンブサルがあります。

「赤んぼがかあちゃんの背中にブツツアッテ、気持ちよさげに、かすかに寝息を立ててネブツ（眠つ）てるよ」人以外の物、例えば、カバンなどを背負う場合にはヒッチョルといって、違った方言を使いますが、ブツツアルは、おぶさるの意以外に、人の力や金に寄りすがるといふ別の意味もあります。

「何でもカンでも親にブツツアッテ（頼って）ペー（ばかり）いネーで、マット（もつと）ミシミテ（まじめに）ヤンナ（やりなよ）」（市民記者 森下喜一）

